

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

平成30年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2018 — Programme

日時：2018年10月13日（土） Date: 13 October 2018

会場：UNITY（ユニティ） [神戸研究学園都市 大学共同利用施設] 2階 セミナー室4
(兵庫県神戸市西区学園西町1-1-1 ユニバープラザ2F)

Venue: Seminar Room 4, 2nd Floor, UNITY (Academic Community Hall), 2nd Floor, Univer
Plaza, 1-1-1 Gakuen Nishimachi, Nishi-ku, Kobe-shi, Hyogo.

理事会 Board of Trustees Meeting (13:30 – 14:00) ユニティ2階 共同研究室

総 会 Annual General Meeting (14:05 – 14:25)

UNITY 2階 セミナー室4 (Seminar Room 4, 2nd Floor, UNITY)

開会の辞・議事：新野 緑 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部長) Midori Niino

(President, The Dickens Fellowship of Japan)

第 1 部 研究発表 Short Paper Session (14:30 – 15:10)

司会：長谷川 雅世 (高知大学) Masayo HASEGAWA (Kochi University)

発表：筒井 瑞貴 (神戸大学) Mizuki TSUTSUI (Kobe University)

「*Barnaby Rudge* における偽装と犠牲」

“Disguise and Scapegoat in *Barnaby Rudge*”

第 2 部 特別研究発表 Special Short Paper Session (15:15 – 15:55)

司会：金山 亮太 (立命館大学) Ryota KANAYAMA (Ritsumeikan University)

発表：桐山 恵子 (京都府立大学) Keiko KIRIYAMA (Kyoto Prefectural University)

「ターヴェイドロップ舞踊学院の徒弟の行く末

— 『荒涼館』および『リトル・ドリット』におけるダンス分析—

“The Future of Apprentices in Mr. Turveydrop’s Dance Academy:

An Analysis of Dance in *Bleak House* and *Little Dorrit*”

第 3 部 ミニシンポジウム Mini Symposium (16:15 – 17:20)

「ディケンズ批評の現在」

Dickens’s Criticism Today

司会：玉井 史絵 (同志社大学) Fumie TAMAI (Doshisha University)

講師：小西 千鶴 (神戸市外国語大学) Chizuru KONISHI

(Kobe City University of Foreign Studies)

講師：瀧川 宏樹 (大阪工業大学) Hiroki TAKIGAWA (Osaka Institute of Technology)

懇 親 会 (17:40 – 19:40) Convivial Party

会場：神戸市外国語大学 三木記念会館

会費：一般 5,000円 学生 3,000円

*共催 神戸市外国語大学



神戸市外国語大学
Kobe City University of Foreign Studies

第1部 研究発表 Paper

Barnaby Rudge における偽装と犠牲

神戸大学大学院生 筒井 瑞貴

Barnaby Rudge の冒頭で語られるルービン・ヘアデイルの殺人事件では、殺人犯のラッジがもう一人の犠牲者である庭師と入れ替わって自らの死を偽装して嫌疑を逃れ、推理小説の常套手段である「被害者＝犯人」のトリックを用いた最初の例としてしばしば挙げられる。しかしながら、スコットランドの作家 James Hogg が中編小説 “the Bridal of Polmood” でこの着想をディケンズに先んじて使っていたことはほとんど知られていない。様々な事情からディケンズがこの作品を読んで影響されたことは大いにありうると考えられるが、そこで重要になってくるのは、このプロットが場当たりの新奇性だけを狙ったものではなく、ゴードン暴動を主軸とする作品の主題と何らかの整合性や統一的効果を意図して導入されたのではないかという点である。本発表では作中におけるラッジの殺人行為の位置づけを再考しつつ、そのプロットにより前景化される自己や他者のアイデンティティをめぐる偽装というテーマに即して作品を分析したい。

第2部 特別研究発表 Paper

ターヴィドロップ舞踊学院の徒弟の行く末 — 『荒涼館』 および 『リトル・ドリット』 におけるダンス分析 —

京都府立大学准教授 桐山 恵子

『荒涼館』のエスタは、ターヴィドロップ氏が経営する舞踊学院で4人の徒弟に出会う。その際、彼女は「ダンスに徒弟制度があるなんて奇妙」と感じ、「彼らの両親は子供に対して、なぜダンスという選択をしたのかしら」といぶかしがっている。本発表では、エスタのこの疑問を出発点とし、徒弟がいる舞踊学院の実態を、ヴィクトリア朝ダンス教師の社会的立場や教室経営の方法、指導内容などと照らし合わせて分析する。ダンスを学ぶ子供たちには、その後どのような職業選択の可能性があったのだろうか。

また監獄という特殊な環境ではあったものの、すでに徒弟期間を終えて、ダンサーという職業を得た『リトル・ドリット』のファニーを取りまく状況にも注目してみたい。彼女はどの程度のレベルのダンサーだったと考えられるのか、トウシューズを履いてつま先立ちが出来たのか、など些細ではあるが、意外に重要とも思われる疑問点を追求してみたい。

第3部 ミニシンポジウム Mini Symposium

ディケンズ批評の現在

司会：同志社大学教授 玉井 史絵

このミニ・シンポジウムでは、二人の若手研究者が、最近出版されたディケンズ関係の研究書を紹介し、ディケンズ研究の現在を考察する。今回は特に「教育」と「子供」に焦点を当てる。このテーマの古典的名著としては、ヴィクトリア朝における教育をめぐる社会状況を広範に論じつつ、ディケンズと教育の関りについて考察した Philip Collins の *Dickens and Education* (1965) や、ロマン主義以降の伝統の中にディケンズの子供の表象を位置づけた Peter Coveney の *The Image of Childhood* (1967) が挙げられるであろう。最新の研究では、この古くて新しいテーマがどのように論じられているのか、そこからどのような今後の研究の展開が考えられるのかを、2冊の研究書をもとに考えていきたい。

講師：神戸市外国語大学大学院生 小西 千鶴

Nicholas Marsh, *Charles Dickens: Hard Times / Bleak House*

‘Analyzing Texts’ として 2015 年に出版された本書は、ディケンズ作品『荒涼館』と『ハード・タイムズ』を題材とする。二部構成から成り、第一部では両作品への言及、第二部では作家の生涯と作品、時代背景、及びこれら作品における他の評論が紹介されている。先行研究に『荒涼館』と『ハード・タイムズ』を、主に女性の登場人物と作家の「自己」との関わりから論じた Alexander Welsh の *Dickens Redressed: The Art of Bleak House and Hard Times* (2000) があるが、本書では作品と社会問題との関わりに焦点が当てられる。著者 Nicholas Marsh は、冒頭部分の共通する強烈な描写から、二作品をそれぞれディケンズの大法官裁判所 (*BH*) と事実偏重教育 (*HT*) への宣戦布告と述べて、場面描写や人物像、そして事の成り行きが、それらに対抗するモラル寓話としての役割を果たしているかどうかを分析、評価している。本発表では、主に「教育」問題について Marsh の議論に着目し検討してゆきたい。

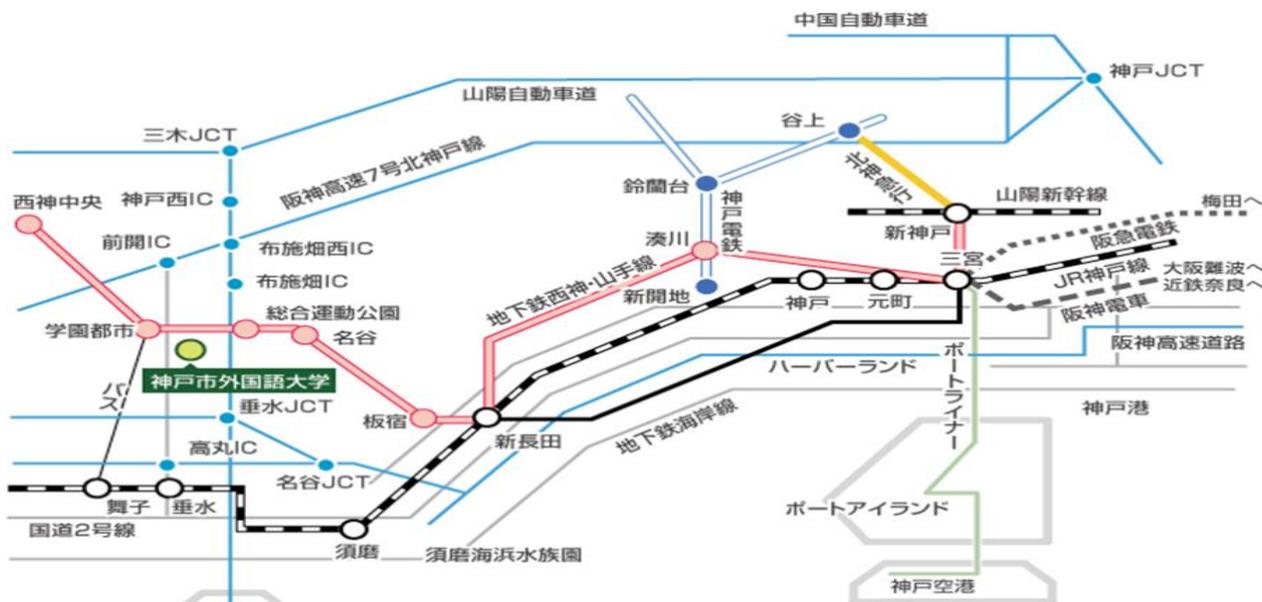
講師：大阪工業大学特任講師 瀧川 宏樹

Peter Merchant and Catherine Waters (eds.), *Dickens and the Imagined Child*

本発表では、3部12章構成の各部からそれぞれ1章を重点的に取り上げ、本書の紹介を試みたい。1部 ‘The Dickensian Child’ から Rosemarie Bodenheimer による ‘Dickens and the Knowing Child’ を、2部 ‘Childhood and Memory’ から Jonathan Buckmaster による “‘Ten thousand million delights’: Charles Dickens and the Childhood Wonder of the Pantomime Clown” を、3部 ‘Children, Reading and Writing’ から Wu Di による ‘Child Readers in Dickens’s Novels’ を取り上げる。本書は、子ども時代の経験と大人の関係性にも重点を置いている。この点を踏まえた上で、the imagined child の意義を考察してみたい。

アクセスマップ

①



②



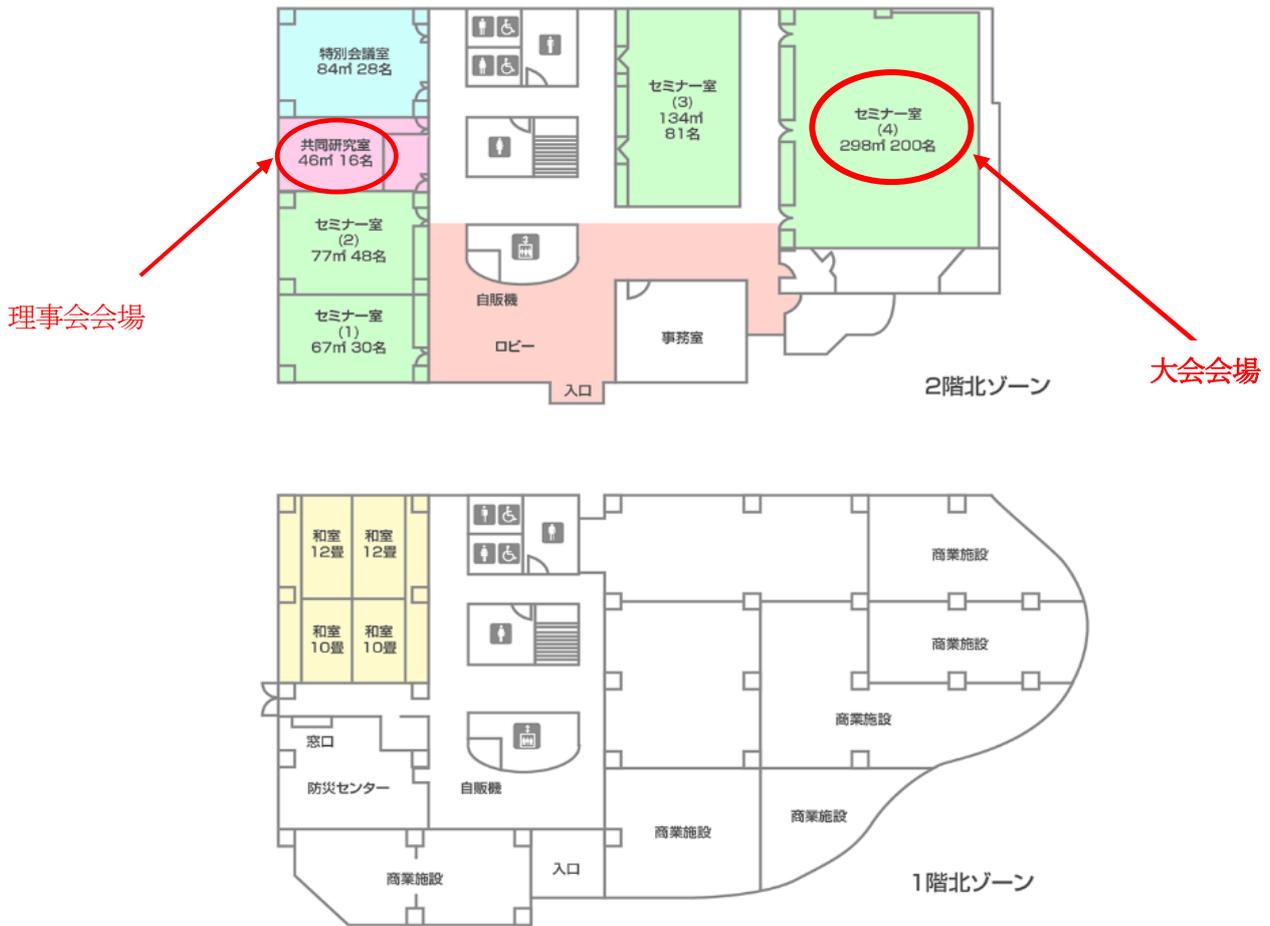
【新神戸駅からのアクセス】

- * 新幹線「新神戸」から神戸市営地下鉄西神・山手線に乗り換え、「学園都市」まで直通、約28分。
- * JR「三ノ宮」、阪急「神戸三宮」、阪神「三宮」から神戸市営地下鉄西神・山手線に乗り換え、「学園都市」まで直通、約25分。
- * 会場の「ユニティ」は、神戸市営地下鉄西神・山手線「学園都市」駅の南隣りにあるユニバープラザという18階建の建物の2階です。
- * 「学園都市駅」の改札を出て直進し、駅ビルを出ると、すぐ右手にユニバープラザの看板と広場があり、その広場の真ん中にエスカレーターがあります。それを上がって、右手の入り口から入っていただくと、「ユニティ」です。ユニバープラザの一階には、居酒屋やコンビニなどが入っています。

【住所】

〒651-2103 兵庫県神戸市西区学園西町1丁目1-1 ユニバープラザ2F TEL:078-794-4970 (UNITY)
 〒651-2187 兵庫県神戸市西区学園東町9丁目1 TEL:078-794-8121(神戸市外国語大学 代表[総務人事班])

会場マップ (UNITY)



キャンパスマップ (神戸市外国語大学)

懇親会場
神戸市外国語大学
三木記念会館

